

## 9 「社会生活力を高めるプログラム」におけるグループ訓練の実施について

伊東重度障害者センター 支援課 菅野博也、三好尉史、小坂瑞穂、  
佐々木桂、水本達也

### 1 はじめに

当センター支援課では社会リハビリテーション、特に利用者の社会的な自立に着目し、その支援の充実を図るため、今年度から若年者を対象として、「社会生活力を高めるプログラム」のグループ訓練を開始したことから、その訓練の取り組み状況に関して報告を行いたい。

### 2 訓練の目的及び対象者

(1) 訓練の目的：「社会生活力を高めるプログラム」グループ訓練は、社会生活力（コミュニケーション能力、情報収集能力等）を高め、社会参加をしていくための力を向上させることを目的とした。

(2) 訓練対象者：訓練対象者は、30歳未満の若年利用者とし、担当ケースワーカーが本人のニーズを確認すると共に、生活支援員間で対象ケースの必要性を検討し、時間割の状況も加味して、最終的に7名（男性6名、女性1名、平均年齢21.7歳）、1グループで実施することとした。

### 3 訓練期間及び訓練方法、内容等

(1) 訓練期間：平成22年6月30日～11月24日（8月は外泊者が多かったため休止）

(2) 訓練方法：週に1回、訓練時間60分（1時限）、訓練方法は講義、グループ学習とグループ討議、ロールプレイ等とし、生活支援員2名がファシリテーターとなり実施。

(3) 訓練内容：具体的な内容としては、社会生活力の各分野のうち、若年者にとって特に重要と考えられた①「コミュニケーションと人間関係」4時限、②「情報」2時限、③「外出」2時限、④「働く」2時限、⑤「地域サービスとサポート」2時限、合計5分野、12時限のプログラムとした。

そして、「社会生活力を高めるプログラムオリエンテーション」及び「社会生活力を高めるプログラムの自己評価」の各1時限を加え、合計14時限の訓練を実施した。

(4) 記録：訓練終了後には、訓練記録を作成し、訓練の反省点等をまとめた。

### 4 訓練状況及び訓練効果（結果）

(1) 当初、利用者も堅さがみられ、発言も少なかったため、ファシリテーターの発言が多かったが、徐々に参加利用者の積極性がみられるとともに、グループとしてのまとまりもみられるようになった。

(2) ロールプレイに慣れない利用者も多かったが、徐々に慣れて、対応が上手になるとともに、ファシリテーターの対応の仕方もより向上してきた。

(3) 利用者によっては、プログラム内容が難し過ぎると感想を述べる者や逆に簡単過ぎると感想を述べる者もいて、グループ訓練を行うときの対象者の選定、アセスメントの重要さが改めて認識された。

(4) 自己評価により訓練プログラムを受ける前と訓練プログラムを受けた後を評価してもらった結果、訓練プログラム後の方が、知識面、実技面とも向上していた。

(5) 訓練効果として、日常的な場面において、他者から観察しても、訓練プログラム導入後に挨拶やコミュニケーション等が、今までと違って明らかに積極的な様子に変わった参加者もおり、ある一定の効果は得られたと考えられる。

### 5 今後の課題

今後の課題としては（1）訓練内容、方法、時間数、対象者の選定（スクリーニング方法、アセスメント方法）のより適切な方法の検討、（2）ファシリテーターとしての技術向上、（3）訓練効果の測定方法の確立等が上げられる。今回は若年者を対象としたグループ訓練としたが、今後は年齢の幅を広げていくことや個別の社会生活プログラム訓練との相乗効果等についても検討を行っていきたい。